

あさっての風

—あなたと共に考える人生論—

三浦綾子



角川書店



あさっての風

定価 650円

昭和47年11月30日 初版発行

昭和48年3月1日 4版発行

著 者 三浦綾子

発 行 者 角川源義

発 行 所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2の13

電 話 東京(265) 7111 <大代表>

振 替 東京195208

郵便番号 102

印 刷 所 旭印刷株式会社

製 本 所 株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

© Ayako Miura Printed in Japan

0095-883038-0946(0)

目次

人間のかかりについて

“関係ない”ということば

無感動の恐ろしさ

あなたは若いだろうか

日記のない青春への疑問

“自分を知る”ことの尊さ

お互いを認めよう

人間 この誤りやすぎ者

ほんとうの大人とは？

信と望みと愛と

なくてはならぬもの

あり得る話 あり得ない話

八 四

六 三 四 五 七

生かされている生命

わたしの遁世

「狭き門よりはいれ」

感銘の一著——聖書

信仰と人生

信仰と文学

祈るということ

与える幸い

悲しみを知る幸い

美しい結婚

せつかちになるな

ほんとうの女らしさ

人はなぜ結婚するのか

三

六

七

九

一〇

一三

一八

二三

二六

三三

三九

四四

姉さん女房

一六

神と夫との共同生活

一六

親と子と教師と

子どもと淋しさ

一八

自分ひとりの思い

一八

わが父を語る

一八

教えられた話

一九

母よ自由であれ

一六

かけがえのない命

二〇

子どものゆくて

二〇

ほんとうの教師とは？

二五

風物によせて

六月とわたし

水芭蕉

夢日記

闇の匂い

雪女郎と少女の頃のわたし

お正月の想い出

雪の旭川

美しいわがふるさと

伊藤整先生のこと

学説様々

噂あれこれ

「どうもありがとう」の一言

あとがき

二四

二三

二五

二六

二四

二六

二五

二六

二七

二五

二九

二三

二七

装
幀・
カッ
ト

中
西
清
治

人間のかかりについて



“関係ない”ということば

いまも、はやっているだろうか。ひところ、しきりに、

「関係ない」

ということばがはやったのを覚えている。このことばは、わたしのきらいなことばの一つである。こんなざらざらした冷酷なことばをしきりに使う人は、体内を流れる血も、氷のように冷たいのではないかと、わたしは思う。

大げさにいえば、この世のどんな人間も、自分とは全く無関係だとは、いい得ないのではないだろうか。

わたしが小学校のときに読んで、忘れられない話がある。

ある金持ちの娘が、汽車の中でバナナを食べていた。そしてその腐ったバナナを、食べられないからといって、窓からひょいと投げてしまった。そこに、ある貧しい子どもが通りかかって、

そのバナナを拾って食べたのである。ところがその子はおなかをこわし、熱を出してしまった。

その夜、金持ちの娘の父親の工場が全焼した。夜警の男が、その夜に限って、夜警を怠ったのだ。それは、わが子が、拾ったバナナを食べたため、熱を出したからである。

たぶんこんな筋だったと思うが、少女のわたしはこれを読んで、人間の世界というもののは、自分の思っているよりも、密接なつながりのあることを思つて非常におそれを感じたものである。

この話は、少年少女向きに書かれているので、因果関係がハッキリしているが、わたしたちは日常生活において、案外これに似た深いかかわりを、ほかの人と持ち合っているのではないだろうか。

日本じゅうのどの新聞にも、毎日、必ずと言ってもよいほど出ているのは、交通事故の記事ではないだろうか。交通事故にはいろいろな原因もあるであろう。ある朝、ふとしたことから妻とけんかをした運転手が、カッと頭にきて自動車をふっ飛ばす。そして、あつと急ブレーキをかけたときには、既に幼い子どもの命を奪っていたという例など、たぶん数えきれないほど多いことだろう。

それまでは、全く見ず知らずの人間であった、どこかの幼い子どもが、これまた見ず知らずの男のために命を奪われる。命を生んでくれる親との関係が深いように、命を奪い、奪われたとい

う関係はまた、取り返すことのできないほど、恐ろしい密接な関係である。幼子を奪われた親にとって、憎んでも憎みきれない相手が、突如として出現するのだ。

こう考えてみただけでも、わたしたちは、あいっには関係がないとか、こいつには用がないとは、けっしていいないのではないだろうか。

ことし、わたしたち夫婦は、台湾から招かれて、三週間にわたる講演旅行が予定されていた。台湾では、このわたしの講演会のために、各地から集まって、準備会議を開いていた。

ところが、二月にはいつて、父が危篤状態になった。このために、わたしは台湾行きを断念せざるを得なかった。台湾には、再び行く機会も与えられることだろう。しかし、父の死は、娘にとって、生涯にただ一度限りのことである。台湾の人々には、まことに申しわけのないことだったが、わたしは父をおいて日本を離れる勇氣はなかった。

こうして台湾行きを中止したわたしたちの所に、ある人が、深刻な悩みをかかえて相談に来た。わたしたち夫婦は、深い同情をもってその話を聞き、できうる限りの助言をした。その人はやっと己れを取り戻し、自分の進むべき方向を見出すことができた。そしていった。

「もし、あなたがたに相談にのっていただけなかったら、わたしは子どもふたりを車に乗せて、

共に、山の崖から谷底に飛びこむつもりでした」

わたしは、背筋の寒くなるのを覚えた。

父がもし元気であったなら、わたしたちは台湾に行っていた時期である。わたしたちが台湾に行っていたなら、この人は必ずや、自動車もろとも、ふたりの子どもと共に、谷底に転落していたにちがいない。

ここでまた、わたしは人間と人間との、深いかかわりを身にしみて感じたのである。この人と、わたしの父は、一、二度ことばをかわしたにすぎない間柄である。この人からみると、ひとりの老人にすぎないわたしの父の病氣は、自分とは何の関係もないものに使われたかもしれない。しかし、わたしの父の危篤が、その人たち三人の命を救ったともいえるのである。

そのときわたしは、しみじみと思った。けっしてわたしたちは、

「だれのせわにもならずに生きている」

とか、

「だれにも迷惑をかけたことがない」

とか、あるいは、

「自分ひとりで生きて来た」

などと、大きな口はきけないものだ、思わずにはいられなかった。だれに対しても、頭を下げたくなるほど、けんそんな思いで生きなければならぬものだ、つくづくと思ったものである。

命の生き死にかかわる問題だけが、わたしたちの人とのかかわりではない。わたしたちが何気なく、バスの中でじろりと人を一べつしたその表情に、ある人は一日じゅう、ゆううつな思いをさせられているかもしれない。

また、行きずりに、

「ちょっとすてきな人ね」

と、自分のほうを見てささやくのを聞き、そのことでいく日も楽しくなったりすることもある。人間とは、全く見知らぬ人でさえ、これほど、たちまちかわりあいのできる存在なのだ。まして親兄弟、親類、教師、級友などのそのひとりひとりの生き方が、どれほど大きくかわりあっていることか。わたしたちには計り知ることのできないほど、それは深く複雑なものにちがいない。

ところで、話は一転するが、わたしをキリストに導いてくれた恋人、前川正という人は、わた

しの幼なじみだった。

わたしが小学校二年、彼が小学校四年のとき、二戸建ての家に、隣同士で住んでいたのである。一年たって、彼の家は、五町ほど離れた所へ引っ越して行った。

引っ越してからは、学校の廊下で会っても、道で会っても、お互いニコリともせず、おじぎもなかった。

わたしが女学校四年生のころ、姉とふたりで、お祭りの露店が並ぶ雑踏の中を歩いていた。その雑踏の中で、わたしたちは何年かぶりに前川正の姿をみたのである。

「あれ、前川さんの正さんね」

すれちがってから姉がいった。

「あら、そう」

と、わたしはちょっとふり返った。そして、何歩も歩かぬうちに、もう彼のことはすっかり忘れてしまっていた。いわば、彼はたんなる行きずりの人にしかすぎなかったのである。自分とは全く関係のない人に見えていたのだろう。

ところが十年後、わたしたちは再び、めぐりあった。そして、わたしが小学校の二年のとき以来、初めてことばをかわしたのである。実にその間二十年の歳月が流れていた。

路傍の人と思っていた彼は、わたしを真剣にキリストに導いてくれた。当時自殺を企てるほどに虚無的だったわたしを、墮落の生活から、救いあげてくれたのである。

とにかく、よくも悪くも、わたしたちは、実に多くの人と、かわりのある存在なのである。しかも、わたしたちは、遠い外国におけるひとりの人の生き方さえ、自分にかかわるということも知っている。

たとえば、シュバイツァーの生き方に感動して、自分の生き方が変わったという人は、世界にどれほど多いことだろう。

同時代のみならず、三千年まえに生まれた釈迦や、二千年まえに生まれたキリストが、いまの世にも、生き生きと、どれほど強力にわたしたちを導き、どれほどわたしたちの人生を変えていくかわからない。

わたしたち現代に生きる者が、怠惰な者は怠惰なりに、真実な者は真実なりに、どれほど大きく作用し合い、かわりあっているかわからないのだ。

つまり、小さいながら、わたしたちひとりひとりの生き方が、多くの人の運命とかかわりあっている。

それは、少し想像力の豊かな者なら、ただちに理解できるこの世の現実なのである。